様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ４ 月 ２５ 日現在

機関番号：４１６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１９４

研究課題名（和文）80年代中国映画に見る黒澤明映画の受容に関する映画記号学的研究

研究課題名（英文）Semiotic Study on Acceptance of Akira Kurosawa 's Films in the 1980s Chinese Films

研究代表者
福島　ひろ子（張紅）（Fukushima, Hiroko）

郡山女子大学短期大学部・文化学科・講師

研究者番号：１０５７０９４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究計画はこれまで受けた科研などの成果を踏まえ、80年代中国本土における黒澤映画の受容について検討することを目的としている。
　世界における日本発の映像コンテンツの受容の研究の多くはアニメやゲームであり、日本の映画についての言説が少ない。実は、日本の映画が早い時期から世界から注目され、特に中国語圏の映画制作よび世界への進出に与えられた影響は大きいと認められる。
　本研究計画は、所期の目的のために、黒澤明の映画作品そのものについて考察したほか、関連資料の収集および調査を行い、また、日本で開催されたアジア関係の映画祭などにおける最新の動向を把握することにつとめた。

研究成果の概要（英文）：　This research project is to examine the acceptance of Kurosawa's films in mainland China in the 1980s.
　Many studies on accepting video contents originating in Japan from around the world are animation and games.However, there are few discourses about Japanese films.Actually, it is recognized that the influence given to the films production of the Chinese-speaking world and the advance to the world is great, since the world's films has attracted attention from the world from an early period.For the purpose of this research, this research plan considered Akira Kurosawa's film work itself.We also collected and investigated related materials.Furthermore, I worked to grasp the latest trends in the Asian-related film festival etc. held in Japan.

研究分野：映画記号学

キーワード：中国映画　1980年代　黒澤明映画　日本発映像コンテンツ

１．研究開始当初の背景

筆者は 2008 年、東北大学に学位論文『＜日本的なもの＞の表象としての黒澤映画―映画記号学的視点からのアプローチ』を提出した。当該論文は、黒澤映画の全作品を対象に、特にこれまで論じられることの少なかったその映画における＜日本的なもの＞の表象（*representation/image*）について、映画記号学（*Semiotics of cinema*）の視点から考察しようとしたものである。その後、科研費基盤（C）「中国語圏における日本発映像コンテンツに関する基礎的研究」を申請し、特に台湾や香港における黒澤映画の受容について調査を行ってきているが、その内容は極めて初歩的なものである。

本研究計画はそれらを踏まえつつ、さらに地域を広げ、年代も 80 年代に絞って、つまり 80 年代中国本土における黒澤映画の受容について検討することを目的としている。それは、中国語圏における黒澤映画の受容はまさに 80 年代から始まったことによるものだと考えられるからである。

例えば「第五世代の映画作家」とされる張芸謀が＜日本人の黒澤＞から＜世界のクロサワ＞になったその成功の術は＜日本的なもの＞にあると考える。張の映画に数多くの＜中国的なもの＞を盛り込み、その映画は初期の黒澤のそれと同じく、当初（80 年代）、国内では不評だが、後に海外では認められ、＜中国的なもの＞として歓迎されているのである。つまり、現代中国の映画に与えられた黒澤映画の影響は、映画術はもちろん、「東洋」を超えて、世界へ羽ばたくための成功の術まで及んでいるのである。

これはもちろん、中国に限らず、例えば『羅生門』や『七人の侍』がアメリカでの上演の際、アメリカのマスメディアでは、「不気味なほど異国の空気を漂わせ観客を魅了した『羅生門』」（『ニューヨークタイムズ』紙、1956 年 11 月 20 日）、「戦いなるもの、人間なるもの、かくも心を揺さぶるよう謳いあげられることの珍しい『七人の侍』」（『タイム』誌、1956 年 12 月 10 日）などとしても紹介された。

学位論文や前回受けた科研費基盤（C）「中国語圏における日本発映像コンテンツに関する基礎的研究」では、それらの事実と研究の必要性を指摘しておいたが、具体的に検討することはできなかった。

生誕１００周年を迎え、今でも人気を博している黒澤映画に対する再評価がどうしても必要であり、また日本発映像コンテンツのアジアへの進出を考える場合でも、不可欠であると考え、本研究計画を着想するに至ったのである。

世界における日本発の映像コンテンツの受容は近年、マスメディアや産業界などから盛んに取り上げられ、注目を浴びているが、多くはアニメやゲームなどが中心で、日本の映画についての言説が少なく、過小に評価されているようにさえ思える。実は、日本の映画が早い時期から世界から注目され、特に中国語圏の映画制作よび世界への進出に与えられた影響は大きいと認められる。

２．研究の目的

この研究計画は、前回受けた科研基盤（C）「中国語圏における日本発映像コンテンツに関する基礎的研究」の問題意識および研究成果を踏まえつつ、日本を代表する映画作家である黒澤明の映画の 1980 年代の中国における受容を事例とし、映像文化論および映画記号学の視点から二つのことを特に明らかにしたい。一つ目は日本発映像コンテンツが現代中国語圏の映画制作や世界への進出のためにどのような影響を与えているかを検討すること、二つ目は生誕

100 周年を迎え、今でも人気を博している黒澤明の映画に対する再評価を試みることである。

３．研究の方法

所期の目的のために、前回と同様に、具体的には現代中国語圏を代表する侯孝賢（台湾）、徐克（香港）と張芸謀（中国大陸）等の映画作家たちの作品を研究の対象とし、映像分析と関係者へのインタビューによる一次的資料の収集などを通じて、現地の研究協力者の協力を得ながら、可能な限り客観的に検討することを目指す。と同時に、日本の各地で開催されるアジア映画祭を実地調査し、その新しい動向を把握することも目的に据えているのである。

しかし、決定された配分額が申請額より大幅に少なくなったため、この二つの方法よりの実施は困難であるため、前者については一部しか実施できず、結果的には主に後者の方の方法で実施した。

４．研究成果

【平成 26 年度】日本発映像コンテンツとして、重要なのはアニメであろう。そのため、実施計画に従い、前半は広島国際アニメフェスティバルに参加した。ハンガリーやカナダ、イタリアの巨匠たちのアニメ作品に見られると思われる日本的影響を探った。また、映像メディア関係の学会や映画祭などに参加し、映像に関する最新技術の話題を集めたりした。東京国際映画祭については、アニメを日本から世界へ発信し、日本のソフトパワーを世界に見せたいという意欲が強く打ち出されているという印象を持った。それは近年、韓国や中国など他のアジアの国々の映画祭の開催規模に押さえられてきた東京映画祭の新たな方法転換でもあり、今後も引き続き注目していく必要があろう。それと関連して、京都ヒストリカ国際映画祭は映画草創期や黄金時代の作品および過去の時代を題材にした映画が日本映画の歴史を知る上では大変有意義だった。

後半は日本映画そのものに関する研究の最新動向の把握に努めた。例えば第 10 回日本映画学会の研究発表を例に見るならば、小津安二郎、木下恵介、黒澤明などの日本名監督の作品に対する分析や映画の中の中国系移民問題、戦後韓国映画の傾向などに関する研究発表は新鮮な内容が多かったように思われる。それと同時に、日本映画の草創期の遺跡を調査し、また日本アニメを世界に送り出した手塚治虫記念館などを訪ね、資料の収集も実施した。日本映画の歴史と共に、アニメの歴史についても調査する必要性を痛感した。そのため、年初め早々、早稲田大学演劇博物館で資料調査を試みたのである。

年度末は中国北京と武漢へ出張し、北京電影学院や中国電影博物館、武漢大学などにおいて資料収集と研究の打ち合わせを行い、中国における日本映画の資料保存と研究の現状を知ることができた。次年度の研究活動にとって示唆になる材料を多く得ることができた旅となった。

【平成 27 年度】研究の目的および研究実施計画に基づき、国内と国外において関連の映画祭などに参加し、本研究に関する資料の収集と研究の打ち合わせを行った。

国内においては、前半は「新大久保映画祭」、第 28 回東京国際映画祭および第 7 回神戸ドキュメンタリー映画祭などに参加し、アジア映画の最新の動向の把握に努めた。多文化共生の現代社会の中で、映画というコンテンツを通じて、多国間の相互の文化を尊重し、相互理解を深めようとする主催側の意欲が窺えた。また、「新大久保映画祭」では韓国映画が多数占められ，内容が多彩であり、若い映画人たちの創作パワーが感

じられ、収穫が大きかった。東京国際映画祭では数多くの外国作品が日本の観客に紹介されたほか、日本のコンテンツを世界にアピールする絶好の場としての映画祭だったように思えた。また、神戸ドキュメンタリー映画祭では、日本発地域の記憶、時代の記憶としての作品に魅せられ、映画の歴史をさらに深く掘り下げてみたいという意欲が湧いてきた。さらに、一部の大学において、戦前の映画に関する資料を調査した。後半は福井映画祭を見学し、自主制作映画が特徴である同映画祭を見学出来たことはとても良かった。

国外においては、北京、上海へ出かけ、中国本土での調査旅行を行った。これは当初の研究計画の一環としてではあるが、現地の映画関係者との交流や映画関連施設での資料収集を通じて、最新の動向を把握することができて、今後の研究の進展に大きく寄与するものと考える。

【平成 28 年度】

最終年度にあたる平成 28 年度の研究成果は主として二つに分けられる。

一つ目は日本国内で開催されたアジア関係の映画祭への参加および資料の収集である。これについては、9 月下旬に福岡国際映画祭に参加し、選定された映画の上映を通じて、最新のアジア映画事情を把握することができた。また、その際、アジア映画ライブラリーが収蔵されている福岡市総合図書館を訪れ、資料収集を行った。また、10 月下旬に、第 29 回東京国際映画祭に参加し、前年度に続き、アジア関係の映画を中心に鑑賞したほか、それに関わる資料の収集を行った．世界の映画の秀作が集結した東京国際映画祭に参加してみて、東京はまさにアジア映画の拠点だという認識を新たにした。後半では神戸市、高松市、豊橋市などの地方映画祭への視察を行った。これらの地域に於ける映画祭は地域文化の振興と活性化を目的とした主旨が強く印象付けられた。「アジア映画ブックフェア」にも立ち寄って、貴重な書籍を入手することができた。予想を超える収穫が得られた。

二つ目は国内における文献資料の収集および学会参加である。文献資料の収集については、京都大学や東京大学などに出かけた。また、『海賊と呼ばれた男』公開記念特別展に参加した。学会については日本映画学会第 12 回大会への参加を行った。

普段なかなか鑑賞することができない多彩な映画を実際に見たりして、より広い視野から最新のアジア映画事情を把握することができた。また、例えば映画祭の期間中の関連イベントと併設されたマーケットのように、映画祭を新たな交流の場として注目されるとともに、東京映画祭の特徴の一つとして定着されつつあるという印象を受けた。しかし、日本映画を海外へ発信する方法はまだ改善の余地があるとも感じた。さらに、「映画と戦争」というテーマについての研究は今後の課題になろう。

そうした活動を踏まえ、黒澤明の映画作品そのものについての映画記号学的考察も行い、その成果の一部を 3 編の論文に結実して発表した。

例えば、「映る〈日本の伝統美〉―黒澤明映画における〈能〉の表象―」（平成 27 年 3 月『郡山女子大学紀要』第 51 集所収）では、黒澤明映画における〈能〉表現の応用法に焦点を当て、彼の全作品について遂一検討を行い、それらを踏まえながら、その特徴の全体的な解明を試みた。本論文の考察から分かるように、＜能＞の応用は黒澤映画の制作のすべての過程に貫かれており、それは初期の実験的な試用から、中期の多様化ないし後期の全面的な映画の＜能＞化に至るまで、映画と＜能＞が密接不可分の関係を持っている。また、映画作家としての黒澤の視野には常に＜日本＞と＜西洋＞

の両極が存在しており、この二つの存在を意識しながら、映画を通して，それぞれの違いを強調しようとしたのである。＜日本の伝統美＞とされる＜能＞の諸要素を積極的にその映画に取り入れようとしたのは、大きな背景を辿るなら、そのような事情にもよっていたと考えられる。さらに、黒澤の映画制作の芸術的、文化的、精神的な原点はまさに＜日本的なもの＞の表象としての＜日本の伝統美＞とされる＜能＞にあったことは本論文における考察から明らかとなったのである。

また、論文「娘・妻・母―黒澤明映画における〈女性〉の表象―」（平成 27 年 3 月『郡山女子大学紀要』第 52 集）では黒澤映画における「女性像」について考察を試みた。それによると、黒澤の映画作品の中では＜女性＞がさまざまなイメージで扱われていること、また、役者としていずれも当時一流のスターを起用していることがわかった。例えば、原節子、香川京子、京マチ子および溝口映画の看板女優・山田五十鈴などは、当時はもちろん、日本映画史上においても、いずれも代表的な女優だったといえる。この論文では、さしあたり家庭における女性の位置に応じて、便宜上、黒澤映画における＜女＞を＜娘＞、＜妻＞、＜母＞という三つに分け、それらについて全作品を対象として調べてみた限りでは、黒澤映画における＜女性＞たちのイメージはいずれも特徴的であり、多彩多様に表現されていることが認められる。＜娘＞から＜母＞に至るまで、あるいは＜学生＞から＜教員＞に至るまで、もしくは＜店員＞や＜百姓＞から＜主婦＞＜姫＞＜武士の妻＞に至るまで、本論文では考察をしなかったが、＜女性＞でありながら人間と霊界との間を往来するとされる＜巫女＞から＜雪女＞＜桃の精＞に至るまで、様々なイメージの＜女性＞が登場してきていることが知られた。その手法は実は張芸謀の映画にも少なからずの影響を与えたことがわかる。

さらに、論文「黒澤明映画における〈サムライ〉の表象―『用心棒』と『椿三十郎』における「三十郎」という「無法者」をめぐって―」（平成 28 年 3 月『郡山女子大学紀要』第 52 集）では、「無法者」という概念を用い、「三十郎」という人物像に隠された文化的なコードを検討した。本論文で言う「無法者」という言葉は、単なるごろつき、ならず者、盗賊、山賊、匪賊、馬賊、土匪、強盗、人斬り、侠客、やくざ、無頼などを指すより広くまたより日常的かつ一般的な概念として用いることにした。つまり、本論文の課題にしようとしている『用心棒』と『椿三十郎』における浪人の桑畑三十郎および椿三十郎とはそういった連中の一人として捉えられた限りでの「無法者」なのである。このような限定をつけた上で、この二人の人物像の「無法者」ぶりについて記号学的な分析を加えることにした。より具体的にいうなら、これら二人の人物の映像上の衣装、言葉、動作、行為などのシニフィアンを分析することによって、黒澤が描こうとした「三十郎」という「無法者」の人物的な特徴（シニフィエ）を明らかにしていくことにしたのである。それによると、「三十郎」という「無法者」には、＜孤独な旅人＞というイメージ、秩序やきまりには束縛されたくない＜破壊的な存在者＞というイメージ、平気で大勢の人を斬り「斬る」ことを問題解決のための唯一の手段と考えているような＜冷血な侍＞というイメージ、金銭や名利に拘らず世俗的な価値観に対して超然たる態度を示す＜厭世者＞というイメージ、権力を嫌い弱きを助け、強きをくじき、策略を巡らし相手を倒す＜侠客＞というイメージなどがある。＜三十郎＞とは，黒澤が生涯にわたって表象しようとした＜日本的なもの＞、＜サムライ＞で

あったと言えるのである。

これらの映画祭のへの参加および実地調査、文献の収集などの基礎的な研究を踏まえ、今後は 80 年代中国映画に与えられた日本映画、とくに黒澤映画の影響について具体的に探っていくことになる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

①福島ひろ子（張紅）、映る＜日本の伝統美＞―黒澤明映画における＜能＞の表象―、郡山女子大学研究紀要、査読有り、51 号、2014、129－181 頁。
②福島ひろ子（張紅）、娘・妻・母―黒澤映画における＜女性＞の表象―、郡山女子大学研究紀要、査読有り、52 号、2015 年、83－102 頁。
③福島ひろ子（張紅）、黒澤明映画における＜サムライ＞の表象―『用心棒』と『椿三十郎』における「三十郎」という「無法者」をめぐってー、郡山女子大学研究紀要、査読有り、53 号、99－115 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
福島ひろ子（FUKUSHIMA　HIROKO）（ZHANG HONG）
郡山女子大学短期大学部・文化学科・講師
研究者番号：１０５７０９４７